

4 シニアキャンパスの成果と課題

渡 邊 洋 子

シニアキャンパスの3日間に関わって、また課題レポートをじっくり読ませていただく中で、中高年世代の熱い学習意欲と切実な学習ニーズの所在を実感した。このように広く共有されている「学習」への想いや情熱に、京都大学が、教育学研究科が、生涯教育学講座が、そして何より、第一に自分自身が、今後、どのように応えていくことができるだろうか？ということ、真剣に考えさせられた。

成人学習者は、外的要因より内発的動機によって学習に向かう傾向にあると、成人教育学では長く指摘されてきた。今回、参加者と懇親会等で話す中でわかったことは、様々な場で学習を重ねてきたシニア学習者にとって必要なのは、必ずしも社会人大学院ではなく、フォーマルでなくともアカデミックなアプローチの手ほどきをしてくれる場だ、ということである。ある参加者は、「私たちは勉強して得た知識はたくさんあるが、必要なのは、より多くの知識ではなく、自分たちがこれまで学んだ多くのことを、どうしたら理論的に裏づけたり体系的にまとめたりしていくことができるか、ということなのです」と話していた。その参加者は、大学院だと受験準備や入学後の単位取得のためのノルマが多く、体力的・物理的にとてもついていけない、とため息をもらしていた。このような学習者に対し、そのニーズと実態に応じて、どのようなアカデミック・サポートをすることができるか、具体的に考えていく必要がある。

以下、生涯教育学講座にとって、今回のシニアキャンパスの成果と課題は何だったのかに焦点をあてて、簡単にまとめておきたい。

第一に挙げられるのは、生涯教育学講座における人材育成上の、すなわち教育上の成果である。実践の科学である「生涯教育学」を掲げながらも、本講座の院生・学生は従来、理論研究や思想研究など、文献を対象とする研究スタイルを取ることが多かった。「生涯学習」や「おとなの学び」も、抽象的理解に陥りやすい傾向にあったことは否定できない。人生経験を重ねる中で様々な悩みや問題を抱えて試行錯誤してきた成人学習者のナマの姿に触れ、その生き方や生活に直結した学習動機や真摯な学習態度、学童とは異質な学習プロセスに向き合う機会が、生活経験の中でも研究活動の中でも、十分に保障されてきたとは言い難いのである。

今回のシニアキャンパスでは、スタッフとして、参加者一人一人に丁寧に向き合うことが、意図しないうちに、成人学習者の実感的理解へと道を拓いていた。そのことを示唆する場面がシニアキャンパスの準備・実施段階において数知れず、見受けられた。講座内外のスタッフにとって、シニアキャンパスは、「生涯教育学」の現場実習の場として、かけがえのない機会を与えてくれるものであった。

第二に挙げられるのは、研究上の成果である。特に生涯教育学においては、実践と理論は表裏一体の関係にある。上記のような教育効果は当然、生涯教育学研究にとって中核的な意味をもち、研究上の実践的センスを磨くものとして作用するのである。理論や抽象概念の操作も、人間存在のリアリティや、人間生活にとって「学ぶ」ことが占める実存的な意味をナマの人間から実感として学び取ることなしには、空虚なものでしかあり得ない。それゆえ、シニアキャンパスにおいて「人が学ぶ」ことの意味と実態にじかに触れ、環境づくりとサポートの観点か

らそこにアプローチする機会をもてたことで、講座の今後の研究の内実をゆたかにしていく上で重要なセンスを、共同でみがき得たのではないかと考える。

これらのことに関わって、今回の「ゆるやかなグループ体制」の採用について補足説明したい。参加者を当初からグループ分けした理由としては、まず、①参加者自身がニーズや意見を表明しやすくする、②スタッフが個々の参加者に目を向けやすくなる（個々の参加者が必要とする情報やサポートを得やすくなる）、③参加者が他の参加者やスタッフと知り合い、気軽に情報交換や意思疎通をするきっかけをつくる（学ぶ場の居心地をよくする）、などの運営上の理由が挙げられる。

ここで、同時に、その教育・研究上の理由にも言及しておきたい。前述のように、生涯教育学講座にとってシニアキャンパス事業は、学習機会の企画・運営を通して、フォーマル・ノンフォーマルな生涯学習の中核的部分を実体験できる、意義ある現場実習と実践研究の場であった。若手研究者や院生等を中心とするスタッフにとって、シニア学習者と直接に交流する時間は、成人学習者理解のためのフィールドワークに相当する経験であり、教育上・研究上ともに貴重な意味をもっていたと言える。一部の参加者から「過保護すぎた」などの声が聞かれたことも、大半の参加者の「このグループの人たちと知り合えてよかった」という喜びの声と合わせ、学習者の多様性を実感する契機となったであろう。

生涯教育学講座における今後の課題としては、以下のような点が挙げられる。

- ① 多様な学習ニーズや個人差に対応した成人（シニア）の学習機会を、既存の教育機関（当面は京都大学）の中でどのように実現していったらいいか。
- ② 成人学習（参加）者が、自らの問題意識や問題関心に応じて、能動的に取り組み、主体的に展開できるような学習場面には、どんな形態と方法が適しているか。それらをどのように組み合わせると効果的か。学習成果はどんな形でまとめていくのが適切か。
- ③ 「学びの場」に自ら積極的にやってくる人たちと同時に、「学ぶ」ことの必要性や意義を明確に認識していない（し得ない状況に置かれてきた）人々の学習をどう考えるか。そこには、どのようなアプローチが可能であり、どんな契機が有効か。
- ④ これまでの人生や生活の中で、「学びの場」「学びの機会」を享受してこなかった人々（学校教育でも生涯学習でもドロップアウトした人々、ないし看過されてきた人々）の学習ニーズや学習動機をどう捉えるか。その生活経験や人生経験を、学習のリソースとして再評価し、新たな「知」を生み出していくには、どんな学習機会やサポート体制が必要か。
- ⑤ NGO／NPOをはじめ、社会的な活動に携わってきた人々が活動の中で経験している「学び」や「知見」と、大学などの場で蓄積されてきた「知」やリソースとが、どのように出会い、いかに協働することで、新たな「知」を生み出し得るのか。
- ⑥ 実践上の課題とアカデミックな理論研究の成果の相互関連をどう図るか。また両者の齟齬に関わる考察や分析を、どのように研究活動に活用していくか。

今回のシニアキャンパス体験は、主催側の私たちにも、多くの教訓や今後への手がかりを提供してくれるものであった。「知の最先端」と社会的に認知される「京都大学」が、今後、そ

シニアキャンパス報告

の独自性とリソースを最大限に生かしながら、「京都大学」なりの方向性をもって真に「社会に開かれた大学」となっていくには、どうしたらよいか。この大きな課題に取り組むための示唆を得られたのは、大きな収穫であった。特に、生涯教育学講座は、今後の生涯学習社会の進展に、専門的見地から大きく貢献すべき社会的使命と責任とを担っている。今回のシニアキャンパスの成果をどのように活用し、さらなる一步を踏み出していくかが、何よりも問われていると言えよう。なお、シニアキャンパス・レポートの中に次の記述があった。生涯教育学講座の今後への激励と示唆として受け止めたい。

- * 京都大学大学院には生涯教育学講座があるので、「社会に開かれた大学」をめざし、年齢制限をもうけない公開講座や、講演会、史跡探訪、また中学・高校生を対象とした実験やフィールド・ワークなどの公開講座など、様々な形で、先生方やキャンパスをオープンにして、「地域や社会に開かれた大学」にしていっていただけると嬉しいです。